

## 日本統治期台湾における仏教留学生の学知・思想 —台湾人仏教青年曾景来を中心として—

大野 育子

はじめに

- 第1節 出生と日本仏教留学
- 第2節 日本仏教学の研鑽と台湾民間信仰研究
- 第3節 台湾宗教改革論からみる宗教思想
- 第4節 非常体制下における活動

おわりに

(要約)

本稿は日本統治期に台湾から日本へ渡り、仏教系教育機関において研鑽を積んだ台湾人仏教留学生曾景来に焦点を当て、その学知及び思想について、彼の仏教留学生という側面に着目し、分析を試みるものである。「眼の上のこぶ」と揶揄された一般留学生と異なり、宗教を媒介とした仏教留学生は、時に総督府と連携し特殊な役割を果たした。台湾在来の宗教をどのように捉え、また日本仏教をどのように受容していったのか、その学知や思想は注視に値する。本稿では、曾景来の著作や投稿等から知識や技術としての学知、また、台湾宗教改革案の提唱や日本式仏教の推奨など、理念としての思想を探求する。第1節では、日本留学までの経緯と日本における学究状況、帰国後の役職及び諸活動を時系列に整理する。第2節では、著作や投稿等から学知の分析を試みる。第3節では、以上を踏まえ曾景来の主張や提唱した理念からその宗教思想を解明していく。第4節では、非常体制下において、曾景来が携わった国家精神教化活動について論じる。

はじめに

1895年から1945年にかけて、台湾から日本へ渡り、主に仏教系教育機関に学んだ台湾人留学生は120名を上回る<sup>1</sup>。1920年初期の段階で、東京在住の台湾人留学生が既に2000人に及んでいた事実から鑑みるに、本稿で対象とする仏教留学生は多数とは言い難い<sup>2</sup>。医学、法律、経済学などが主な専攻として選ばれていた当時において、仏教系教育機関へ進学し仏教学を専攻した彼らは非常に特殊な留学生であると同時に、その背景や帰国後の活動は注視に値する<sup>3</sup>。だが現在まで台湾人による仏教留学に触れた研究成果は少なく、江燦騰が植民地期から現代までの仏教史を研究対象とした著書『台湾仏教百年史之研究 1895-1995』にて一部言及するに留まっている<sup>4</sup>。

日本統治期の台湾では、日本教団仏教、特に曹洞宗、臨済宗妙心寺派が積極的に活動を展開し、在日日本人のみならず台湾人への布教も行った<sup>5</sup>。布教活動の中で台湾在来寺廟の借入や台湾人信徒の帰依等、日台仏教間に往来が生まれると、言語の壁と信仰方式の差異がこれを妨げる大きな障害となった。これを打破し日台間の交流をより円滑に展開するにはパイプ役となる人材が必要であるとの考えから、台湾人青年に対する教育事業が展開された。その結果、駒沢大学をはじめとした日本の仏教教育機関へ進学する仏教留学生が出現し、優れた日本語能力と日台両地の仏教に対する豊富な知識から、仏教界のみならず総督府や台北帝国大学、地方行政機関などで活躍

した<sup>6</sup>。

以上のように現在までの研究では、日本教団仏教の在台活動や日台間の仏教相互連携関係の確立など、仏教留学生台頭に関わる背景を中心に検討を行ってきた。つまり仏教留学生というフィルターを通じて、日本教団仏教の在台諸活動という事象を時系列に分析し、台湾における仏教界一連の活動を1本の線として捉えた研究であった。本稿は同様に仏教留学生を主題としながらも、人物研究としての再考察を試みるものである。1本の線として俯瞰的に見下ろすこれまでの研究方法に対し、当研究は個人に焦点を当て、人物を中心に探求する。一個人を通してその時代を見つめることでこれまで読み取ることのできなかつた横の広がり、いわば面としての歴史が浮かび上がると考える。

本稿では仏教留学生の中でも特に曾景来という人物に焦点を当てたい。曾景来は台湾人として初めて仏教系大学で学士を取得した人物であり、また1945年までの間に執筆した論文数、著作の研究価値、従事した職務等が同期の留学生たちと比較すると突出している。当該人物に焦点を当てることが今回の学知・思想の分析という主題に最も適していると考えられる。

## 第1節 出生と日本仏教留学

曾景来は初めて日本における仏教系大学で学士を取得した台湾人である。同時に帰国後の仏教に関する諸活動への参加も顕著であり、何より執筆文章の多さはその他の仏教留学生をはるかに上回る。曾景来はなぜ日本への仏教留学を志し、帰国後の台湾で仏教に関する諸活動を展開したのであろうか。第1節では曾景来の留学までの経緯、日本における学習状況を中心に概観したい。

### 1. 家庭背景と仏教中学林への進学

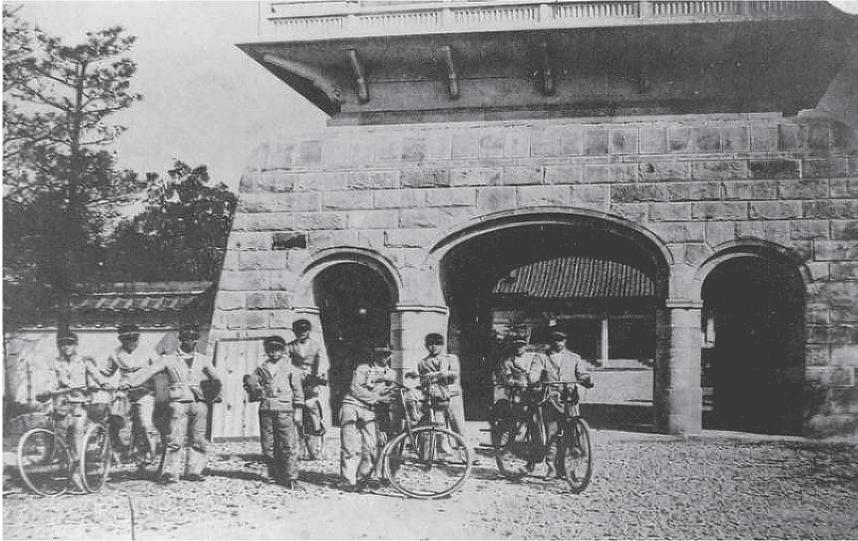
曾景来の出生を知る資料としては駒澤大学学籍資料や、曾景来のまたいところであり同時期に日本へ留学し、後に台北帝国大学助手となり台湾宗教研究に携わった李添春の回顧録、また『六堆客家郷土誌』等が挙げられる<sup>7</sup>。特に学籍資料には出身地や家族構成、留学までの経緯などが詳細に記されており、曾景来の背景を知る上での貴重な一次史料である。

この学籍資料の記載によると、曾景来は1902年に現在の高雄県美濃鎮で農家である曾阿貴の三男として生まれた。15歳まで美濃で過ごし、1917年、美濃公学校卒業と同時に台北にある台湾仏教中学林（現私立泰北高級中学）へ創立第1期生として入学している。台湾仏教中学林は曹洞宗により1917年4月に開設された。当時の台湾では非常に珍しい初等教育を終えた台湾子弟の養成を目的とした3年制の教育機関であった<sup>8</sup>。校舎は台湾別院内にあり、設立当初は寺院内で授業が行われていた<sup>9</sup>。

農家出身の曾景来が何故台湾仏教中学林に学んだのであろうか。そこには李添春の存在が大きく影響していると推測される。

『李添春回顧録』によると、1914年美濃に基隆靈泉寺僧侶が訪れ講演を行い、当時少年であった李添春はこの僧侶とともに靈泉寺へ赴き弟子となったとある<sup>10</sup>。靈泉寺は台湾人僧侶江善恵に

図1 台湾仏教中学林学生と台湾別院



(出所) 泰北高級中学提供。

より1908年に創設された禅宗の流れを汲む当時台湾島内で最も著名な寺院の1つであり、また住職である江善恵は曹洞宗の僧籍を有する日本教団仏教との関わりが深い人物であった<sup>11</sup>。台湾仏教中学林の創設にもこの江善恵が深く関わり、1921年から1932年にかけて校長を務めた<sup>12</sup>。李添春は台湾仏教中学林第1期生として1917年に入学するが、その背後に靈泉寺の後押しがあったことは想像に難くない。『李添春回顧録』によると入学時「私も一緒に入学したい」と曾景来が申し出、ともに入学することになったとされており、これは台湾仏教中学林の学籍資料記載とも一致している<sup>13</sup>。李添春が仏教へ帰依したのは偶然にも靈泉寺の僧侶に目をかけられ弟子となったことに由来するが、曾景来はそんな李添春の姿に影響されてか、自ら入学を希望している。これは李添春の影響も去ることながら、父曾阿貴が敬虔な仏教徒であったことも少なからず影響しているのではないだろうか<sup>14</sup>。

創設当時の中学林は本科と研究科に分かれており、本科の修業年限は3年、研究科は1年であった。学籍資料によると曾景来は本科に学び、受講科目は表1の通りであった。

表1 大正6年における台湾仏教中学林の授業科目一覧

専門科目	宗学、仏学、修身
一般科目	国語（講演、文法、作文、書取、話方、習字）
	数学（算術、代数、幾何）
	漢文、英語、地理、歴史
その他	博物、弁論、体操

(出所) 台湾仏教中学林学籍簿。

仏教系教育機関であるため宗学、仏学が専門科目として開設されているが、一般教科の比重も重く国語、英語、地理、歴史、算術、体操等も設けられている。授業時間は週 31 時間、その内宗学と仏学の講義は 5 時間であった<sup>15</sup>。また曾景来の成績評価であるが、3 年間の課程において専門科目の成績に伸び悩みが見られる。入学以前、既に靈泉寺で修行していた李添春と異なり、公学校卒業のみの曾景来はおそらく仏教に関する素養が少なかったのではないだろうか。一方、講演や弁論等の成績は秀でており、台湾仏教中学林での経験が後の講演活動を助ける 1 つの経験となったと考えられる。

学籍資料に依ると、1920 年 3 月台湾仏教中学林を卒業した曾景来は同年 4 月、日本の第四仏教中学林（多々良中学）へと編入している。台湾仏教中学林は曹洞宗大学林を中心とした同宗教育機関の 1 つであり、現代的に例えれば曹洞宗大学林の附属中学台湾分校であった<sup>16</sup>。そのため卒業生はエスカレーター式に大学林への進学を可能としたが、設立当初 3 年制度の各種学校であった台湾仏教中学林卒業生は、大学林へ進学するに当たり 2 年間の中学課程の補足が必要となっており、曾景来もこれに従い第四中学林へ編入したと考えられる。

1920 年 4 月、曾景来、李添春を含めた 3 名の台湾人学生が第四中学林へと編入をした。当然のことながらこの第四中学林は曾景来ら以外の学生全てが日本人学生であり、台湾仏教中学林とは大きく異なる環境下で「毎日裏山に行っては学業が辛くて泣いていた」との記載があるほど、学習面での大きな苦勞があったことが伺える<sup>17</sup>。台湾人学生 3 名中 1 名は卒業を待つことなく台湾へ帰国したが、曾景来、李添春両名は 1922 年無事 2 年間の補足課程を修了し、同年 4 月曹洞宗大学林高等部（駒澤大学予科の前身）へ入学し、曹洞宗高等教育機関に初めて入学した台湾からの留学生となった。

## 2. 日本仏教学の薫陶

1924 年 3 月曹洞宗大学林高等部を卒業後、同年 4 月曾景来は曹洞宗大学林仏教学科に進学した。曾景来の学知や思想を探求するに当たり、日本で受けた教育内容の分析は重要である。では曾景来は具体的に日本でどのような科目を受講し、また誰に師事し、どのような活動を行ったのであろうか。

筆者は駒澤大学教務部の協力を得て、1895 年から 1945 年までの台湾人留学生の学籍資料の閲覧を行った。曾景来に関しては入学願書、在学届、成績表の 3 種類が残されており、特に成績表に関しては日本における学習状況を把握する上での貴重な史料である。曾景来の成績表から 4 年間の履修状況を表 2 の通りまとめた。

表のカリキュラム一覧から、当時の駒澤大学仏教学科は、外国語以外ほぼ仏教全般に関する専門教科であることが分かる。曾景来は禅学史や禅学概論等必修科目以外に眼蔵、唯心論、起信論、三論、中論等、仏教経典や仏教思想に特化した科目を履修しており、宗教史分野では五教章を選択し、同分野で李添春が基督教史を履修しているのと大きく異なる。ここからも曾景来の興味の矛先を明確に知ることができ、仏教、特に経典や思想に対する学習意欲が伺える。それを証明するかのよう、仏教経典の原点ともいえる阿含経を卒業論文テーマとし、1928 年 3 月保坂玉泉、

表2 履修科目一覧

科 目		担当教員	科 目		担当教員
禪学及仏教学	禅学史	忽滑谷快天	宗教学		金山龍重
	禅浄相関史	岡田宜法	宗教史	五教章	今津洪嶽
	禅学概論	岡田宜法	心理学		福谷益三
	眼蔵	大森知言	教育学		高田儀光
	仏教教理史	今津洪嶽	教育史		宮本覚純
	仏教概論	保坂玉泉	認識論		若守義孝
	唯心論	衛藤即応	東洋倫理	特講	諸橋轍次
	起信論	衛藤即応		学史	諸橋轍次
	三論	佐藤泰瞬	西洋倫理	特講	馬場文翁
中論	今津洪嶽	学史		馬場文翁	
印度哲学		木村泰賢	各宗概要	浄土	加藤秀旭
支那哲学		小柳司気太	優生学		羽原又吉
西洋 哲學	学史	若守義孝	第一外国語 (前期)		立花俊道 岡本忠之丞
	現代	若守義孝			
倫理学		吉田静到	第一外国語 (後期)		立花俊道 高橋五郎
社会学		建部遯吾			

(出所) 駒沢大学学籍簿。

立花俊道両教授の指導の下「阿含の仏教観」を完成させ学士を取得した<sup>18</sup>。

また上記一覧から、曾景来が木村泰賢や衛藤即応等、著名な仏教学者の講義を受けていることが分かる。例えば木村泰賢は東京帝国大学にて高楠順次郎に学び、またイギリス留学経験を有する当時を代表する仏教学者の1人であった。木村泰賢は1930年に他界したため、曾景来は木村の講義を受けた数少ない台湾人の1人ということになる。また衛藤即応も京都帝国大学を卒業し、1921年から1924年にかけて英、仏、独に留学し、インドから華南を経て帰国をした人物である。曾景来が衛藤即応の講義受講したのは1924年から1928年の間であり、まさに欧米留学直後であった<sup>19</sup>。

『駒澤大学百年史』によると、曾景来が入学した翌年1925年、大学令の発令にともない曹洞宗大学林も現在の駒沢大学へと改称し、単科大学へと昇格した。大学の変革にともない学内のカリキュラムも見直され、留学経験を持つ教員の講義は特に人気があり、こうした教員を介して学生も西洋文明を見聞きし、触発されていったとある<sup>20</sup>。

在学時におけるこれら仏教学者との関わりは曾景来の学知や思想の形成になんらかの影響を与えたと考えられ、前述のごとくいかなる研究背景を持った教員に師事しどのような指導を受けたかは重要な論点であると考えられる。上記教員や論文の指導教授であった保坂玉泉<sup>21</sup>や立花俊道<sup>22</sup>等も近い存在であったと推測されるが、曾景来が特に影響を受けたと考えられるのが忽滑谷快天である。

1932年2月の『南瀛佛教』に「歓迎忽滑谷快天先生」と題し曾景来は以下の内容の文章を発

表している。

……先生は学生指導がとても熱心で門下生には特に深い愛情と関心を寄せてくださいます。例えば寮生が病気になったと聞けば体温計片手にすぐ学生寮へ向かい自ら看護し、また学費に困窮した学生に対しては自費を投げ打ってでもこれを助けます。……以前先生が「学生に眼をかけることは私の趣味のようなものです」とおっしゃっておられましたが、ここ数十年來精神的にまた物質的に先生の愛護を受けた学生は多く、またそれらの学生の多くが社会的に相当な地位を得ています。ここからも先生の趣味の高尚さが伺えます<sup>23</sup>。

忽滑谷快天は曹洞宗大学、慶応大学、同志社大学教授を歴任し、1920年から駒沢大学第8代学長を勤めた。欧米への留学経験から英語に精通し、また僧侶でありながらも世帯を持ち日頃は平服で過ごす人物であった<sup>24</sup>。1932年、忽滑谷快天が台湾へ渡航した際、上記のような文章を発表し熱烈に歓迎するほど両者の交流は深い。曾景来は大学時代、駒澤大学台湾学生会に参加している。この学生会は曾景来が在学していた1927年5月に設立され、当時曾景来以外に6名の台湾人留学生在学生会会員として参加、そして学生会の会長として留学生指導に当たったのが当時の学長忽滑谷快天であった<sup>25</sup>。

曾景来の「歓迎忽滑谷快天先生」の一文から見る限り、忽滑谷快天は非常に面倒見がよく学生との距離も近かったようである。忽滑谷快天が当時既に学長でありながら、会員が10名に満たない小さな学生会の会長職を引き受けた事実からも、特に日本に不慣れた留学生を眼にかけ面倒を見てきたことを伺い知ることができる。また文中に書かれた寮とは曾景来を含む台湾人留学生在が住んでいた竹友舎のことであり、1923年関東大震災後に再建され、学長忽滑谷快天が命名し

図2 駒澤大学台湾学生会  
(前列右より保坂玉泉、忽滑谷快夫、後列右が曾景来、左が李添春)



(出所) 陳国政『李添春教授回顧録』台北、楊運登・李弘生発行、1984年、19頁。

図3 昭和初期の駒沢大学（右手前瓦屋根が竹友舎）



(出所) 曾令毅氏提供。

たものと言われている。竹友舎建設前、駒沢大学には300人以上を収容できる学生寮があり、経済面や学生保険など、寮の管理は全て学生により行われていたが、大震災後の混乱状況を避けるため新しい竹友寮は忽滑谷快天自らが寮監督となり学生とともに生活をした。『駒澤大学史』には「忽滑谷快天の生活態度は竹友寮で生活する学生に大きな影響を与え、毎日の朝会における講演は特に深い感銘を与えた」<sup>26</sup>との一文があり、忽滑谷快天と学生との交流の深さが示されている。

日本統治期の台湾から駒沢大学へ学んだ台湾人留学生は総勢51名、その内大学部仏教学科へ進学したのは曾景来を含めわずか3名である。当時の駒沢大学は大学部に3学科、また附属機関として専門部を開設していたが、カリキュラムや教師陣から見て仏教学科が大学の特色を最大に反映した専門学科であったと考えられる。専門部にも仏教科が設けられており、26名の台湾人留学生が学んだ。専門部は大学部仏教学科に比べカリキュラムや修業年度が異なり、さらに学士を取得することはできず、仏教学科と専門学科の間には学業成果上ある一定の差異があると言える。

曾景来は1917年4月に台湾仏教中学林に入学し、1928年3月に駒澤大学仏教学科を卒業するまでの約10年にわたる間日本において仏教学の教育を受けた。その就業年数は台湾人仏教留学生の中でも特に長く、曾景来の学知・思想を知る上での重要な背景になっていると考える。

### 3. 帰台後の主な活動

1928年3月、駒澤大学大学部仏教学科を卒業した曾景来は日本に留まることなく、台湾へ帰国する。その後、留学経験を生かし様々な活動に従事した。帰国後の曾景来の活動拠点として先ず南瀛仏教会が挙げられる。

南瀛仏教会とは総督府により1922年に設立された全島規模の仏教組織であり、講演会の開催や機関雑誌の発行により台湾仏教界の学識レベル向上を目指したものであった<sup>27</sup>。計16回の仏教講習会、3回の婦人講習会、また各地に設置された分会への定期巡回講演を行い、機関雑誌『南瀛仏教』は、1923年7月から1943年12月にかけておおよそ毎月発行された。駒澤大学在学時

表3 曾景來の講演活動一覧

日 時	場 所	講演テーマ	
1928年 (昭和3年)	5月19日	台中市下橋子頭王爺廟	「慈悲円満之聖者」
	5月20日	台中市下橋子頭林天生家庭	「信仰生活」
	5月22日	台中市桜町陳火炎家	「仏教趣旨」
桜町東榮商会		「新仏教之創設」	
1929年 (昭和4年)	1月4日	南庄庄役所	「仏教所見之現代思想」
	1月17日	「釈尊成道記念講演会」	「釈尊成道観」
	1月21日	豊原女子公学校「児童講和会」	「修養講和」
	2月2日	「豊原少女修養会」	不明
	3月26日～5月	巡回布教活動に従事	不明
1930年 (昭和5年)	1月3日	曹洞宗淡水布教所 「入仏式」	不明
	1月6日	淡水布教所	不明
1932年 (昭和6年)	4月8日	台北萬華龍山寺	「仏陀之誕生」
	5月13日	大稻埕	「東洋思想」
	9月30日	第13回講習会	「仏教概論」
	10月8日～14日	中壠円光寺「第3回仏教講習会」	不明
1933年 (昭和7年)	4月7日～9日	台北釈尊降誕会	不明
	5月18日	台北州立農業伝習所	「農村信仰」
1934年 (昭和8年)	3月7日～20日	龍泉寺 第14回講習会	「日本仏教史」
	4月5日	「釈尊降誕記念講演会」	「非常時と平常心」
	4月8日	萬華龍山寺「釈尊降誕記念講演会」	閉会の辞
	6月6日～7日	九份金山堂金山寺	不明
	11月13日～26日	台南彌陀寺 第15回講習会	「仏教教理概説」
1935年 (昭和9年)	4月8日	台北市蓬萊町稻江会館	不明
		龍山寺	閉会の辞
1936年 (昭和10年)	4月8日	萬華龍山寺 北部講演会	不明
	4月13日～26日	第16回講習会	「近代日本仏教」
	10月30日	新竹州「仏教大会」	「台湾仏教の使命」
1937年 (昭和11年)	6月12日～26日	「龍華派仏教講習会」	不明
1939年 (昭和13年)	8月6日～9月23日	第1回「敬神教化指導者講習会」	「旧慣宗教に基づく迷信陋習の反省」

(出所)『南瀛仏教』(台北、南瀛仏教会、1923～1943年)各巻号。

から『南瀛仏教』に投稿していた曾景來は、帰国後の1929年、正式に南瀛仏教会講師に任命される。その後曹洞宗の台湾巡回布教師にも任命され、台湾各地で講演活動を展開している。曾景來が行った講演のすべてを把握することはできないものの『南瀛仏教』記載から活動の一部を表3のようにまとめることができる。

現存資料で明確に把握できる講演会は約30回、講演場所は台北だけでなく、台中や台南の寺院、一般家庭等台湾各地に及んでいる。講演内容も仏教教理に関するものから日本仏教について

等、多方面にわたっている。また帰国後の曾景来は、母校である台湾仏教中学林にて教鞭もとっている<sup>28</sup>。資料の不足から着任時期や期間、担当科目等は不明であるものの、教職や講演活動は曾景来の学知及び思想を台湾社会へ発信する1つの直接的なツールになったと考えられる。

中学林教諭、また台湾各地での講演、執筆活動等、幅広い活躍を見せていた曾景来は、1933年総督府文教局社会課嘱託に任命される。同課は台湾の宗教全般を管轄する部署であり、曾景来の前任は李添春であった。日本統治期台湾において総督府に従事する台湾人は少数であり、社会課が李添春や曾景来を嘱託として雇用したことから、彼らのような日本留学経験を有する人物が仏教界のみならず総督府からも重視され、重用されていたことが伺える<sup>29</sup>。

曾景来が嘱託になった1933年は日中戦争勃発から2年、台湾がまさに国体明徴の波に飲まれて行く時期であり、1935年に国体明徴が叫ばれると1936年には台湾でも民風作興運動が展開され、台湾在来の文化や信仰が整理の対象となっていった<sup>30</sup>。まさにこの時風を受け、総督府の意向の下、曾景来は台湾在来宗教の研究を行う。その集大成が1938年に出版された『台湾宗教の陋習と迷信』である。この本についての詳細は以下の節で具体的に考察するが、同書は台湾在来宗教の信仰内容や実態、またその改善方策など、曾景来の見解が凝縮された1冊であり、曾景来の学知・思想の分析上の最も重要な著作の1つであると考えられる。

このように中学林教員や南瀛仏教会記者、各地での講演活動や総督府嘱託等、曾景来の帰国後の活躍は目覚ましく、仏教界や総督府から重視されていた様子が伺える。ではこのような幅広い活躍を見せた曾景来はどのような学知を有し、またいかなる思想を発信したのであろうか。以下その学知・思想について検討を試みたい。

## 第2節 日本仏教学の研鑽と台湾民間信仰研究

第1節において、曾景来の学知・思想の背景とも言える留学までの経緯や日本における学習状況、また帰国後の諸活動を紹介した。第2節では第1節での背景分析を基盤に、曾景来の学知について探求して行きたい。学知とは個人の知識とその深さを示すものであり、曾景来に関してはその投稿や著作から追求することが可能であると考えられる。

### 1. 日本仏教学の伝播

曾景来は台湾で公学校を卒業後、台湾仏教中学林入学から駒澤大学を卒業まで、おおよそ10年にわたる間、日本仏教学の薫陶を受けた。大学において、仏教経典や仏教思想に関する講義を受講したことは上記で考証済みであるが、それを反映するかのように、曾景来は大学在学時及び卒業直後において仏教経典、仏教思想に関する内容を『南瀛佛教』など雑誌に投稿している。また詳細は以下で論述するが、総督府の嘱託となった1936年前後から、台湾の迷信に関する投稿が仏教雑誌のみならず『台湾時報』など当時の新聞にも多数掲載されている。曾景来の学知を理解する上で投稿は重要な参考資料であるため、表4のように一覧としてまとめた。

1925年から1945年にかけて曾景来は主に『南瀛佛教』、『中道』、『台湾時報』への投稿を行っ

表4 1925年から1945年までの投稿一覧

	題名	巻号	題名	巻号
南 瀛 仏 教	「仏教捷徑（1-10）」	第4巻第3号- 第6巻第5号	「所謂仏陀教」	第4巻第4号
	「善悪根源之研究（1-4）」	第4巻第5号- 第5巻第4号	「仏教与耶蘇教」	第5巻第1号
	「釈尊の宗教」	第5巻第2号	「悟りとは何ぞや」	第5巻第3号
	「仏とは何ぞや」	第5巻第4号	「阿含の仏教観（1-10）」	第5巻第6号- 第7巻第3号
	「識心論」	第6巻第6号	「毘多王子帰仏因縁談」	第7巻第2号
	「曾景来氏巡回随録」	第7巻第3号	「須打破流弊」	第8巻第1号
	「仏陀の成道怎麼樣」	第8巻第3号	「仏陀及其教法」	第8巻第4号
	「長寿王物語」	第8巻第6号	「罪悪感」	第8巻第7号
	「進化論与仏教的劫説」	第8巻第10号	「仏陀と羅睺羅」	第8巻第10号
	「台湾寺院管見」	第9巻第3号	「現代日本仏教」	第9巻第3号
	「何謂精神」	第9巻第3号	「婆羅門教」	第9巻第4号
	「仏理二則」	第9巻第6号	「怎麼要信仰仏陀？」	第9巻第7号
	「舍衛城中一椿事」	第9巻第9号	「歡迎忽滑谷先生」	第10巻第2号
	「阿闍世王帰仏因縁」	第10巻第4号	「仏陀底出家」	第10巻第5号
	「台湾宗教会設立の提唱」	第10巻第8号	「提案一則」	第10巻第8号
	「戒律底研究」	第10巻第9号	「仏教より観たる思想問題（1-2）」	第11巻第1号- 第11巻第2号
	「自由と平等」	第11巻第3号	「自我の問題」	第11巻第4号
	「阿含の仏陀傳（1-4）」	第11巻第4号- 第11巻第7号	「台湾仏教界を回顧する」	第11巻第7号
	「人為財死鳥為食亡」	第11巻第8号	「弹琴の喩」	第11巻第10号
	「寒山捨得」	第11巻第11号	「現実的社会と人生の理想」	第11巻第12号
	「皇国と仏教」	第13巻第4号	「老子と道の思想」	第13巻第5号
	「聖徳太子の偉業」	第13巻第6号	「民間信仰に現はれたる土地公」	第13巻第8号
	「禅宗血脈」	第13巻第9号	「閩長官と天台の三隱隱」	第13巻第10号
「仏教各宗祖師略傳」	第13巻第11号	「近代日本仏教名家略傳（1-19）」	第14巻第2号- 第15巻第10号	
「台湾に於ける石の崇拜」	第15巻第11号	「開元禅寺記略」	第15巻第12号	
「台湾於樹木崇拜」	第16巻第1号	「台湾習俗と虎」	第16巻第2号	
「有應公の研究」	第16巻第3号	「台湾の寺廟と其の対策」	第16巻第4号	
「台湾の怪談」	第16巻第9号	「吳鳳廟物語」	第16巻第11号	
「台湾仏教資料」	第16巻第12号	「兔伝説」	第17巻第2号	
「龍の伝説」	第18巻第2号			
中 道	題名	巻号		
	「道徳より宗教（1 - 3）」	第58巻 - 第60巻		
台 湾 時 報	題名	巻号		
	「台湾寺廟物語」	1937年4月～7月		
	「台湾習俗に現れたる虎」	1938年1月		
	「台湾の怪談に就いて」	1938年7月		
	「兔に関する台湾の伝説」	1939年1月		
	「龍に関する台湾の伝説」	1940年1月		
	「海南島の迎年」	1941年1月		

（出所）『南瀛仏教』（台北、南瀛仏教会、1923～1943年）各巻号、『中道』（台中、台中仏教会館）各巻号、『台湾時報』（台北、台湾時報発行所、1909～1945年）各号。

ている。

特に日本統治期台湾において最も著名な仏教雑誌の1つである『南瀛仏教』には約100篇にも及ぶ投稿をし、その内容も多岐にわたっている。

曾景来の初めての投稿は「佛教捷徑」と題され、内容は主に仏陀の遺訓や聖訓等、仏教教義に関するものであった。「佛教捷徑」は駒澤大学へ在学中の1925年10月から、卒業直後の1928年9月まで続けて連載されており、同時期には善悪の根源、悟りや仏について、また仏教とキリスト教の比較など、並行して様々な内容の投稿をしている。曾景来は自身の卒業論文である「阿含の仏教観」も、1927年11月から翌年5月まで、10回に分け投稿している。

1930年前後までは仏教經典や教義に関する内容が主であったが、1929年10月に「須打破流弊」を発表して以後、徐々に宗教改革に関する投稿が中心となっていった。総督府囑託となった1933年以後はその傾向がさらに強まり、社会課において民間信仰の研究に従事した1938年以降、台湾寺廟や習俗に関する文章を多く執筆している。

また曾景来は、上記の様な仏教經典や教義の研究以外に、日本仏教学者による研究成果を漢文訳し主に『南瀛仏教』に投稿している。特に、総督府内務局社寺課課長を歴任し、台湾初となる全島宗教調査を行った丸井圭治郎著作を、表5の通り多数翻訳している<sup>31</sup>。

現在までに把握している資料に依る限り、曾景来は初めて仏教系大学にて学士を取得した台湾人である。在学時は忽滑谷快天をはじめ、木村泰賢や衛藤即応、また立花俊道や保坂玉泉など、当時を代表する仏教学者の薫陶を受け、またこれら仏教学者の多くは明治期に宗門海外留学生としての留学経験を有していた。

つまり曾景来は日本の仏教学者を介して、間接的に近代的仏教学を会得した台湾人仏教学者と称しても過言でないのではないだろうか。このように考えると、曾景来が発表した文章も台湾人仏教学者による研究成果となり、台湾仏教界の学識レベルを引き上げる1つとなったと捉えることもできるのではないだろうか。

日本統治期以前の台湾では、仏教組織や教育機関はなく、仏教を学問として研究する人物はいなかった。日本統治期に入り、台湾仏教中学林が設立され、曾景来のような留学生が現れたことで、仏教を研究対象として捉える知識人が誕生した。曾景来はその代表的人物の1人であり、彼の様な人物が執筆活動により様々な研究成果を台湾社会へ発信していったことは、それまでの学術界に1つの変化をもたらせたと言えるのではないだろうか。特に曾景来は日本仏教学者の論文

表5 曾景来による丸井圭治郎作品漢文訳一覧

題名	巻号	題名	巻号
「台湾宗教序論」	第12巻第2号	「台湾旧慣信仰」	第12巻第3号
「道教与儒教」	第12巻第4号	「台湾旧慣仏教」	第12巻第5号
「儒釈道三教之関係」	第12巻第6号	「旧慣信仰の対象」(上・下)	第12巻第7号、第8号
「台湾旧慣祠廟」	第12巻第9号	「台湾宗教与仕者」	第12巻第10号
「台湾齋教」	第12巻第11号	「台湾旧慣的神仏会」	第12巻第12号

(出所)『南瀛仏教』(台北、南瀛仏教会、1923-1943)各巻号。

を積極的に漢文訳し、台湾社会へ発信していった。その活動は特徴的で、注視に値する。

## 2. 台湾在来宗教の研究

1931年（昭和6年）の満洲事変発生以後、日本は徐々に非常時期へと移行し、各植民地においても同化政策が重要事項となった。台湾総督府もこの影響を受け、台湾人の国家精神を涵養すべく対策を模索した。1936年7月、台湾において民風作興協議会が開催され、国家神道の浸透や日本語の普及等、台湾人教化に関する事項が政策として打ち出された。この時、迷信打破や陋習改善、生活改善等台湾土着の信仰風俗に関する内容も話し合われ、その改善策が協議された。台湾の信仰に関して、総督府が打破や改善等の政策を打ち立てたのはこれが初めてであり、その傾向は翌年1937年7月、日中戦争が勃発するとさらに加速していった<sup>32</sup>。

1938年10月、曾景来は『台湾宗教と迷信陋習』と題された台湾民間信仰に関する研究書を発表している<sup>33</sup>。これは当時嘱託として総督府文教局社会課に勤めていた曾景来が、迷信打破や陋習改善の方針を受け書き下ろした学術書であるが、台湾在来の信仰宗教を紹介するだけでなく、随所にその問題点や改善を客観的にまた時には曾景来自身の見解を直接発信し、迷信打破に関する具体的改革案が多岐にわたり提示されている。

曾景来は著書の冒頭で「陋習の大部分は伝統信仰と密接な関係があり、風教政治やその他各方面に弊害をもたらしている」と語り、また「生活改善、迷信及び陋習の打破には先ずその温床である民間信仰を理解しなければならない」と民間信仰研究の重要性を訴え、さらに迷信打破、陋習改善運動の指導者層に向けて「もし教化指導者が民衆の心情や信仰を理解せずこれら問題の処理に当たるなら、間違いなく労力だけ奪われ成果が得られない」<sup>34</sup>と、単なる台湾の民間信仰に対する研究に留まらず、教化の指南書としての役割も果たすことが表現されている。

『台湾宗教の迷信と陋習』は主に以下の5つの部分に大別できる。

- ① 台湾寺廟対策の提唱
- ② 台湾伝統怪談の研究
- ③ 台湾呪術（紅姨、導士）の研究
- ④ 各種崇拜に関する研究  
（自然崇拜、偉霊崇拜、動物崇拜、精霊崇拜、祖先崇拜等）
- ⑤ 台湾習俗研究

第1部分に関して曾景来は、台湾民間信仰の源流から、民間信仰における儒、仏、道の三教混合の原因を求め、同時に、三教混合の各地寺廟に対する処理策を提示している。第2部分では、台湾伝統の怪談と信仰の関係を、様々な怪談から実証し、台湾人の人生観と怪談との関係性を分析している。また第3部分の台湾の呪術に関しては、主に紅姨と道士を取り上げ、両者の社会的地位や使用する呪術の内容、また、社会に与える影響等を詳細に紹介している。第4部分では、台湾民間信仰の崇拜形態について論述している。樹木や石等を崇拜する自然崇拜、呉鳳に代表さ

れるような偉霊に対する崇拜、兎や龍など動物に関する崇拜、また、精霊や最も一般的な祖先に対する崇拜等、これら具体的事象を元に検証している。最後に、曾景来は台湾特有の金銀紙類、お札、風水などの習俗を挙げ、迷信との関連性を考証している。

日本統治期の台湾において、土着の迷信や習俗は度々追求され、多くの人物によりその改善が提唱されてきた。しかし、そのどれもが台湾伝統の迷信を陋習と定義付け、また、その弊害を強調し、打破や改善を強く訴える内容であった。これに比べ曾景来は台湾人仏教学者の立場から同書を執筆し、その内容は在来信仰の詳細な紹介や具体的対策案等、実証性に富んでおり、台湾宗教教化の指南としての役割だけでなく、学術的価値の高いものであったと言える。

### 第3節 台湾宗教改革論からみる宗教思想

『台湾宗教の迷信陋習』の文中からも一部垣間見えるが、曾景来の執筆文章にはいくつか台湾宗教や仏教信仰に対する個人の見解、また主張が見られる。第3節では、執筆活動を通じて発信された主張や理念から曾景来の思想を探索したい。

#### 1. 正信の追究と改革案

『台湾宗教の迷信陋習』の第1部分「台湾の寺廟とその対策」において、曾景来は台湾在来の寺廟は、宗教的系統からして儒、仏、道の三種に分類されるが、厳密な意味において、これらはいずれも既に混合し一大民間信仰となったとしている。三教が融合している、つまり台湾には純然たる仏教がないことを示唆し、台湾人仏教学者として、また僧侶として、本来の仏教のあり方を模索する態度が数多くの文章から読み取れる。例えば、「台湾寺院管見」と題された文章で、以下の意見を発表している。

現在の僧侶は正しき信仰を持たないのみならず、頻りに民間に行はれる迷信を迎合しては反教的行為をする者が多い。例えば俗に云う北斗経、三官経、関聖經、血盆経、救苦経等は原来佛教の経典ではなく迷信鼓舞の邪経外典であるにも拘らず僧侶達は好んで是等の経文を読誦し又は批判せず宣伝する。そのために今では佛教の真精神は殆ど没却されて不可思議なものになって仕舞った<sup>35</sup>。

これは帰国後の1931年9月に執筆されたものであるが、台湾特融の儒、仏、道が融合した状態を経典に着眼し批判しているところに曾景来の特色が見て取れる。また続けて以下の内容を記している。

一佛一神を信ずるものは其の正信にして節操高潔なることを証明する、又宗教を発達史的に見ると多神教は多く未開人に依りて信仰され、中流以上の人は大数一神教を奉ずる様である。然るに現今台湾一般の信仰は神仏混合の多神的原始信仰である。故に台湾佛教を整理し

改革するには最初に一佛（釈尊）信仰を鼓吹するべきである<sup>36</sup>。

台湾の一般的寺廟では、数十体から多くは数百体に及ぶ神仏が、儒、仏、道の区別なく一緒に祀られている。曾景来はこの台湾特融の信仰形態を多神教であると定義づけ、「一佛一神を信ずるもの」つまり、一神教こそが正信であると強調し、台湾仏教の改革にはまず一佛を徹底すべきであると強調している。

この「一佛一神を信ずるものは其の正教にして節操高潔なることを証明する」という主張は、大学時代に交流の深かった忽滑谷快天の思想に通ずる所がある。

1932年2月、忽滑谷快天の台湾特別講演に際して『南瀛仏教』（第10巻第2号）に多くの忽滑谷快天に関わる文章が投稿された。その中で忽滑谷快天の代表的思想として「四一主義」が紹介されており、その具体的内容として「信一佛不信余佛」、「奉一教不奉余教」と記されている<sup>37</sup>。まさに上記文章の曾景来の主張と同じである。

曾景来は台湾仏教や信仰について、批判的見解を展開する一方で、多数の改革論も提示している。そしてその多くが具体的で、且つ台湾の実情に適し、実効性のある内容となっている。例えば1932年10月に発表した「台湾宗教会設立の提唱」では以下の発言をしている。

今や台湾宗教は当然改革すべき時機に到達した。而も儒佛道の三教が同時に改革をしなければ効果を得ることは困難である。即ち佛教を改革したからとて道教がよくなるものではない、強いて言えば所謂台湾佛教なるものがないからである。故にいざ改革と云ふ時には三教は歩調を共にし改革を同時にすべきである<sup>38</sup>。

つまり、台湾宗教の改革には必ずこの三教を同時に着手しなければならず、そのためには仏教のみならず、儒教や道教も交えた「台湾宗教会」たるものを設立し、宗教教育機関の設立、宗教者資格の設置、住職の任免、宗教的行事の統一聯合、宗教調査、機関雑誌の発行、財産造成の7項目にわたる改革事業を遂行すべきだとしている。

台湾在来信仰が三教融合したものであるとの主張は、日本人僧侶や宗教研究者によっても発表されている。例えば、1929年総督府の依頼を受け渡台し、全島規模の宗教調査を実施した増田福太郎もその代表的な著書『台湾本島人の宗教』で同様の指摘をしている。ただし増田の場合、三教融合の台湾宗教を客観的に分析し、その実態報告するに留まり、一歩進んだ見解は発表していない。これに対し曾景来は、三教融合の台湾宗教に対する改革を詳細にわたり述べ、またその意義を以下の通りまとめている。

三教を打って一丸となし、さらに徹底的に融和混合せしめて改革を共にすべきである。然る時は三教は運命を共に利害得失を均等にすることができ、これまで甚だしかった宗教者間に於ける反目乃至反乱を避けることができ、積極的にはより正信的教派はより迷信的教派を指導することになるし、迷信もみだりに宣布されずに済み、宗教開発の為め三教共同一致

の精神を以て進めばやがて台湾宗教の特色と真価が見出される<sup>39</sup>。

この「台湾宗教会」設立の提言は、日本人宗教学者には得られない観点であると言える。日本統治下台湾の宗教改革に関して、日本僧侶及び総督府文教局関係者は台湾の仏教に特化しており、儒教、道教には着目していない。南瀛仏教会はその名の通り仏教に特化したものであり、儒教や道教などには眼を向けていない。そのため曾景来は南瀛仏教会ではなく「台湾宗教会」を新たに設け、三教が機能分化するように転換することで、台湾宗教の特色と真価が見出せるとしている。ここが日本人宗教者との大きな違いであり、台湾人としての台湾民間信仰に対する理念が伺える。

## 2. 肉食妻帯の肯定

仏教を信仰するアジア諸地域では、通常僧侶は菜食し、妻帯しない。これは現代台湾でも同じである。しかし日本では、浄土真宗で僧侶の妻帯が認められており、また 1872 年太政官布告により正式に僧侶の肉食妻帯が許可された<sup>40</sup>。台湾へ日本仏教が伝わった明治末期では、僧侶の肉食妻帯はすでに一般的であり、台湾へ渡った多くの日本人僧侶がすでにこの慣例に従っていたと考えられる。当然、このような日本僧侶特有の習慣は台湾人にとっては異質であり、特に菜食を信仰の基盤とする齋教と抵触する部分が多くあった。そのため、日本統治下の台湾において僧侶の肉食妻帯が信徒を遠ざけるという事例が多く見られた。しかし、そのような日台仏教文化衝突の中、曾景来は僧侶の肉食妻帯を肯定的に捉え、自らそれを実践した 1 人であった。

1928 年帰国後の曾景来は台中仏教会館で生活している。台中仏教会館とは、1922 年に創建された仏寺であり、住職林徳林は曹洞宗布教師を務め、日本への留学経験こそないものの忽滑谷快天の仏教思想に強い影響を受けた人物の 1 人であった。曾景来は、その台中仏教会館で林徳林紹介の下結婚をしている<sup>41</sup>。日本留学経験を有する曾景来にとって、僧侶の身分でありながら家庭を持つことは決して仏教思想に反するものではなかったと推測される。しかし、前述のように当時の台湾社会において僧侶の妻帯はごく稀であり、林徳林が自身の結婚後儒教団体から痛烈な批判を浴びたように、曾景来も僧侶でありながら結婚をしたことで批判の矢面に立たされたことは想像に難くない<sup>42</sup>。では曾景来は僧侶の肉食妻帯に対しどのような見解を持っていたのだろうか。それを読み解く手がかりとして、以下の文章が挙げられる。

清朝時代から僧侶は非常に軽視されて居たのである。その原因が那邊に在るか、之を明確に言い切る事は困難であるが、恐らく僧侶としての学徳の不備と厳密過重なる戒律に対する自縛的犯行によるものであろう。即ち僧侶は自ら肉食妻帯をせずと云う誓ひを立て乍ら、後に自ら之を犯すに至って、社会一般の攻撃となり嘲弄的となつたのである<sup>43</sup>。

つまり、僧侶が肉食妻帯をせずという厳密過重なる戒律に縛られ、また自らそれを犯すことで社会の攻撃の対象となり、僧侶が軽視されてきた理由の 1 つになったと曾景来は主張している。一見すると僧侶の肉食妻帯に対する批判とも取れる内容だが、曾景来と同時期に駒澤大学へ在籍し、

台湾学生会をともに設立した林秋梧や高執徳にも類似の主張が見られる。例えば、1936年台湾南部で巡回講演中の高執徳は、僧侶の妻帯にともない信徒が大幅に減少した仏寺に対し「住職が結婚したからと言って参拝者が減る。この道理が理解できない、むしろ歓迎すべきではないのか、因襲に従う単身は偽善になりやすく、道徳心が強くなければ過ちを犯しやすい。むしろ公明正大に結婚をする方が良い」<sup>44</sup>と発言し、また林秋梧も、単身でいることが人格の高尚さや教養の深さを表すものではなく、表面的な戒律や規定に拘泥することは、台湾仏教の発展を妨げるとしている<sup>45</sup>。またここで注視すべきは、この曾景来の肉食妻帯思想の背景に、忽滑谷快天の影響が垣間見えるということである。林秋梧の記述によると「先生は青年時代形式に囚われる規制宗教を嫌っていたようである。聞くところによると先生は曹洞宗の中で率先して平服を着用し、結婚をした第一人者であるようだ。当時は異端者扱いを受け、多くの排撃を受けたものの、決して心折れる事なかった」<sup>46</sup>とある。つまり大学時代に忽滑谷快天の門下生であった曾景来は、その思想や信仰形態に影響を受け、帰国後の活動に反映されていると考えられる。

戦後日本教団仏教勢力が台湾から撤退し、代わりに中国仏教会台湾省分会が設立された。戦後の台湾仏教は、中国人僧侶主導により脱日本化が進められ、当然僧侶の肉食妻帯が進められることはなかった。つまり曾景来のような妻帯をした台湾人僧侶は、日本統治期という環境と日本仏教の影響を強く受けた特殊な背景から偶然に生まれ、また戦後継承されることなく衰退していった。

曾景来が日本統治期に提唱した思想や信仰形態の特異性は、戦後の変化と照らし合わせることでより如実に浮かび上がるのかもしれない。現在関係資料が非常に少ないが、今後戦後の曾景来の活動と思想の展開を追っていければと考えている。

#### 第4節 非常体制下における活動

1937年盧溝橋事件にともなう日中戦争勃発を受けて、植民地台湾でも戦時体制が引かれた。国民の団結、国家奉仕精神の涵養が重要事項として掲げられ、同年9月には国民精神総動員本部が台北に設立された。この国民精神総動員本部を拠点とし、所謂皇民化政策が施行され、翌年1938年には国家総動員法が施行された<sup>47</sup>。

この1937年以降の一連の流れは、台湾仏教界にとって大きな分岐点であった。台湾が戦時体制に入り、皇民化政策が施行されたことで国家神道の宣揚が強く叫ばれ、仏教もこれを受け入れる必要が生じたためである。この時期「皇国仏教」、「尊皇敬仏」などのスローガンが掲げられ、同時に台湾各地で護国仏教団の設立や、仏教僧侶錬成所の開設、皇国仏教講習会等の開催が行われているのも、このような事情によるものであると考えられる。このような仏教と国家神道思想の結合現象を、曾景来はどのように捉え、またどのような思想を展開していったのであろうか。

国家総動員法が施行された1938年8月、総督府は台湾総督府国民精神研修所官制を公布し、台湾神社付近に国民精神研修所を建設した<sup>48</sup>。この研修所は、各地方で活躍する社会教化指導者に対し、尊皇敬神思想や教化の根本精神、具体的指導方策を教授し、地方教化の足掛かりとする

目的で設立された。所長として総督府文教局局長が、また副所長として社会課課長が充当され、翌年 1939 年から敬神教化指導者講習と称して、1941 年まで計 10 回の講習会を開催した<sup>49</sup>。

この講習会において、曾景来は数回にわたり講師を務めている。1939 年 8 月 6 日から 9 月 23 日の間、草山（現陽明山）の林間学校で開催された第 1 回講習会は、台湾各州庁の街庄長、助役、市街庄職員など総勢 180 名が参加し、13 名の講師が招聘された。当時総督府嘱託として民間信仰の研究に従事していた曾景来は「旧慣宗教に基づく迷信陋習の反省」というテーマで講演を行っている。また講演内容こそ不明なものの、翌年にも同講習会に講師として参加している<sup>50</sup>。敬神教化指導者講習に関する資料は少なく、『台湾総督府国民研修所』とタイトルされた研修所の紹介冊子や総督府公文類纂のわずかな記載によると、曾景来は講習会に講師として参加した唯一の台湾人であった。非常体制下における教化活動に曾景来が深く関わった事実から、台湾民間信仰や日本仏教への造詣深い曾景来を、総督府及び当時の宗教界が重要視していたと捉えることも出来るのではないだろうか。

講習会から遡ること 6 年、1935 年 4 月に「皇国と仏教」というテーマで、曾景来は以下の文章を発表している。

我が国に於いては儒仏思想に接触しない前に於いて既に建国の当初から堅実に伝承されていた皇道即ち皇国精神を持っていたのである。故に此等の思想に接触しても、能く之を咀嚼し消化して純然たる自己葉籠中のもの即ち日本的にすることが出来たのである。……仏教は宗教であり、而も優秀なる宗教であると謂われているが、然し如何に優秀なるものであっても之が皇道と相容れないものであったならば、決して我が国に伝播することは出来なかったのである<sup>51</sup>。

仏教が伝来する以前に、日本には皇国精神つまり国家神道につながる思想が形成されており、それを吸収し日本独自の仏教となったこと、また仏教がいかに優秀な宗教であっても、皇国精神と融合しなければ日本において伝播することができなかつたと曾景来は分析している。またさらに、仏教と皇道の共通点として以下の通りまとめている。

敬神崇祖は皇道の重点であり、現世に於いて死者の冥福を祈ることは仏教と皇道の一致である。これが皇国と仏教との重要な契縁である。皇室は即ち国家なれば勅願に成る寺は即ち鎮護国家の道場とも云うべきである<sup>52</sup>。

ここで注目すべきは、1931 年の段階ですでに皇道と仏教の関連性、つまり国家神道と仏教との共通点とその融合について、上記のような認識を有していたことである。日本で仏教学の薫陶を受けた曾景来にとって、皇道と仏教は決して相反するものではなく、共通性のある 1 つの概念であった。そのため敬神教化指導者講習会のような、国家精神の宣揚に関わる活動への参加もごく自然に受け入れられたのではないだろうか。このような活動への参加が、日本仏教学の影響を強

く受ける曾景来の特色を浮き彫りにしていると考ええる。

## おわりに

明治時代に入り、廃仏毀釈やキリスト教の自由化など、それまで事実上の「国教」とされてきた日本仏教は、大きな環境の変化にともない多方面にわたる改革を行った。特に教育事業を重視し、仏教青年の育成を重点的に展開した。各宗門大学の設立と同時に、優秀な人材を主に欧米等海外へ派遣し、これら留学生は帰国後宗門大学の教授となり、日本仏教界の学識レベル向上に大きな役割を果たした。つまり、近代日本仏教学の礎は、当時の留学生によって築かれたと言っても過言ではないのである。

留学とは、自国を離れ他国に身を置くことで、直接的に異文化に触れ、短期間に大量の新しい知識を吸収することを可能とする。留学生は、自国と他国との間に文化や制度、知識や思想の移動、連鎖のパイプを形成しその媒介者となる。そして、自国で身につけた知識や習慣を、他国にて得た新しい知識と対比させることで、両者を咀嚼し、新しい観点や思想を生み出す重要な役割を果たしてきた。明治を代表する仏教留学生として、浄土真宗本願寺派の高楠順次郎、大谷派の南条文雄、曹洞宗の忽滑谷快天、また後に東京大学に宗教学講座を開設した姉崎正治などが挙げられる。彼らは後に、日本を代表する著名な仏教学者として活躍し、日本仏教界に影響を与えた。

曾景来は、近代台湾における高楠順次郎、南条文雄、忽滑谷快天、姉崎正治であったと言えるのではないだろうか。高楠、南条、忽滑谷、姉崎が英語に精通し、欧米式仏教研究の手法を用いた仏教学を日本で教授したように、曾景来も優れた日本語能力を有し、日本で得た仏教学の知識を台湾へ発信した。例えば、曾景来は唯心論や阿含経について、時には漢文で、時には日本語で執筆し『南瀛佛教』など雑誌に発表している。また、日本仏教学者による研究成果の漢文訳にも積極的であり、日本仏教学という新しい知識を台湾へ導入する役割を果たした。1938年に従事した台湾民間信仰研究は、日本での仏教学の薫陶を受けた曾景来が改めて台湾の宗教を振り返り、その実態の探求を試みた一大研究であった。その研究成果をまとめた著作『台湾宗教の迷信陋習』から、曾景来が台湾仏教の課題や、民間信仰における迷信等を、自文化でありながら俯瞰的に分析し、冷静な改革案を提唱していることが伺える。さらに曾景来は日本僧侶特有の肉食妻帯を肯定的に捉え、台湾人僧侶でありながら自らも妻帯する等、日台仏教文化間に連鎖のパイプを形成しその媒介者となった。

一方で、非常体制時に「敬神教化指導者講習会」への参加、つまり皇民化運動の一端に携わっており、その政治的活動への参与から、日本政府に寄り添う御用僧侶のような印象を与え、客観的評価を妨げる要因の1つとなっている。しかし、学術面での貢献、またその改革思想などは非常に特殊であり、時代背景を強く反映し、また日本統治下台湾における仏教留学生の特徴を顕著に表すものであり、分析には大きな意義がある。

本稿では、特に曾景来を分析対象としたが、今後も人物研究としてその他仏教留学生の学知や思想に言及していきたい。

## 注

- 1 留学生の総数は各宗『海外開教史』や学籍資料などを中心にまとめた。現在まで把握している宗派別内訳は曹洞宗派留学生 73 名、臨済宗 15 名、浄土宗 2 名、浄土真宗大谷派 1 名、浄土真宗本願寺派 28 名、不明 1 名である。また曹洞宗派の主な留学先としては曹洞宗大学林 (のちの駒澤大学)、浄土真宗本願寺派は中央仏教学院 (のちの龍谷大学) が上げられる。
- 2 東京地区の台湾留学生は 1908 年で 60 名、1915 年には 300 名余り、さらに 1921 年では 2000 人を超えていた(台湾総督府警務局『台湾社会運動史』台北、創造出版社、1989 年、24 頁)。
- 3 日本統治期台湾において、日本への留学は医学と法律が主流であり、医学が全体の 41%、法律が 22% であった。これに続き、経済 12%、商業 8% となり、日本統治期台湾において芸術方面の教育機関が欠乏していたことから、東京美術学校や東京音楽学校へ学んだ留学生も少なくない(呉文星『日據時期台灣社會領導階層之研究』台北、正中書局、1992 年、122 頁)。
- 4 江燦騰『台湾仏教百年史之研究 1895-1995』(台湾、南天書局、1996 年)。
- 5 李添春『台湾省通志稿 2 卷 人民志宗教篇』(南投、台湾省文献委員会、1956 年)、123-124 頁。
- 6 例えば 1929 年駒澤大学卒業の李添春は同年総督府文教局社会課嘱託として宗教調査に携わり、また 1932 年台北帝国大学理農学部助手として配属された。また同じく 1933 年同大学卒業の黄英貴は新竹州中壠郡郡役所の職員として、宗教に関する諸事業に関わった。
- 7 陳国政『李添春教授回顧録』(台北、楊運登・李弘生発行、1984 年)。
- 8 「仏教中学募生」(『台湾日日新報』日刊第 6 版、1921 年 2 月 18 日)。
- 9 1910 年台北東門町に建設。1912 年 9 月台風により本殿が倒れ、1923 年に再建された(『台北州下に於ける社寺教会要覧』台北、台湾社寺宗教刊会、1933 年、225 頁)。
- 10 陳国政『李添春教授回顧録』(台北、楊運登・李弘生発行、1984 年)、21 頁。
- 11 范純武・王見川・李世偉『台湾仏教的探索』(台北、博揚文化、2005 年)、9 頁。
- 12 曹洞宗宗務庁『曹洞宗海外開教伝道史』(曹洞宗宗務庁、1980 年)、248-304 頁。
- 13 陳国政『李添春教授回顧録』(台北、楊運登・李弘生発行、1984 年)、22 頁。
- 14 鐘王寿『六堆客家郷土誌』(屏東、常青出版、1978 年)、509 頁。
- 15 「台湾仏教中学林入学希望者心得」(台北、台湾仏教中学林、1911 年)。
- 16 当時日本国内には曹洞宗大学林(現駒澤大学)を中心とし、4 校の曹洞宗中学林が設立されていた。すなわち曹洞宗第 1 中学林(現世田谷学園)、曹洞宗第 2 中学林(現東北福祉大学)、曹洞宗第 3 中学林(現愛知学院大学)、曹洞宗第 4 中学林(現多々良学園)である(『駒澤大学百年史』駒澤大学年史編纂委員会、1983 年、370 頁)。
- 17 陳国政『李添春教授回顧録』(台北、楊運登・李弘生発行、1984 年)、22 頁。
- 18 曾景来は卒業論文内容を「阿含の仏教観」と題し『南瀛佛教』に 1927 年 11 月から 1929 年 4 月にかけて 10 回に分けて投稿した。
- 19 『駒澤大学百年史』(駒澤大学年史編纂委員会、1983 年)、1849-1850 頁。
- 20 『駒澤大学百年史』(駒澤大学年史編纂委員会、1983 年)、369-372 頁。
- 21 保坂玉泉は 1913 年 3 月曹洞宗大学林を卒業、1916 年曹洞宗大学林講師、1925 年には同校教授となる。1928 年より 9 年間は観音寺住職となるものの、1935 年に復職。代表作に『唯識根本教理』、『仏教学概論』、『禅学研究』などがある(『駒澤大学百年史』駒澤大学年史編纂委員会、1983 年、1850 頁)。
- 22 立花俊道は 1903 年 3 月曹洞宗大学林卒業、同年 11 月より宗門海外留学生としてスリランカへ留学。主にサンスクリット語や原始仏教を学び、1919 年にはオックスフォード大学へ留学。帰国後は第 1 中学林は駒澤大学にて教鞭をとった。著作に『巴利語文典』、『原始仏教と禅宗』、『校註正法眼蔵随聞記』等がある(『駒澤大学百年史』駒澤大学年史編纂委員会、1983、1848 頁)。
- 23 曾景来「歓迎忽滑谷先生」(『南瀛佛教』第 10 卷第 2 号、1932 年 2 月)、21-22 頁。
- 24 『日本仏教人名辞典』(法蔵館、1992 年)、666 頁。
- 25 「駒澤大学台湾学生会出現」(『南瀛佛教』第 5 卷第 4 号、1927 年 8 月)、56 頁。
- 26 『駒澤大学百年史』(駒澤大学年史編纂委員会、1983 年)、1774-1780 頁。
- 27 江燦騰『台湾仏教百年史之研究 1895-1995』(台北、南天書局、1996 年)、121 頁。
- 28 『台北中学校 4 期生卒業 45 周年記念懐念と回顧学窓を偲ぶ』。
- 29 蔡錦堂「台湾宗教研究先駆増田福太郎と台湾」(『台湾宗教信仰』台北、東大図書、2005 年)、41 頁。
- 30 蔡錦堂『日本帝国主義下の台湾宗教政策』(同成社、1994 年)、105 頁。

- 
- 31 丸井圭治郎は台湾総督府にて編修官兼翻訳官を務めた人物であり、1915年から3年間に亘り台湾宗教調査を行い台湾初となる宗教調査書である『台湾宗教調査報告第1巻』を提出した。また1918年には総督府文教局社会課の課長を務めた（蔡錦堂『日本帝国主義下の台湾宗教政策』同成社、1994年、73-76頁）。
  - 32 蔡錦堂『日本帝国主義下の台湾宗教政策』（同成社、1994年）、105頁。
  - 33 曾景来『台湾宗教と迷信陋習』（台北、台湾宗教研究会、1938年）。
  - 34 曾景来『台湾宗教と迷信陋習』（台北、台湾宗教研究会、1938年）、1頁。
  - 35 曾景来「台湾寺院管見」（『南瀛佛教』第9巻第3号、1931年3月）、16頁。
  - 36 曾景来「台湾寺院管見」（『南瀛佛教』第9巻第3号、1931年3月）、17頁。
  - 37 例えば岡部快道「恩師忽滑谷快天博士及其学生」、曾景来「歡迎忽滑谷先生」、林秋梧「現代的戰鬥勝忽滑谷快天老師」、周徳俊「誦忽滑谷老師禪之妙味得一燈」、李添春「東來の達磨」等（『南瀛佛教』第10巻第2号、1932年2月）。
  - 38 曾景来「台湾宗教会設立の提唱」（『南瀛佛教』第10巻第8号、1932年10月）、37頁。
  - 39 曾景来「台湾宗教会設立の提唱」（『南瀛佛教』第10巻第8号、1932年10月）、37頁。
  - 40 中村元他『アジア仏教史』（佼成出版社、1970年）、291頁。
  - 41 陳国政『李添春回顧録』（台北、楊運登・李弘生発行、1984年）、63頁。
  - 42 1927年台中仏教会館の住職であった林徳林が当会館にて挙式を挙げたことで儒教団体からの痛烈な批判を浴びた（江燦騰『日抛時期台湾仏教文化発展史』台北、南天書局、2001年、367-487頁）。
  - 43 曾景来「創立10周年に因み教界の変遷を回顧す」（『南瀛佛教』第11巻第7号、1933年）、14頁。
  - 44 高執徳「回顧台湾仏教」（『南瀛仏教』第15巻第1号、1937年1月）、56頁。
  - 45 林秋梧「從僧尼禁欲談到烏狗烏猫出現」（『南瀛仏教』第12巻第8号、1934年7月）、26頁。
  - 46 林秋梧「現代的戰鬥勝忽滑谷快天老師」（『南瀛佛教』第10巻第2号、1932年2月）、22-23頁。
  - 47 許極燦『台湾近代発展史』（台北、前衛出版社、1996年）、422頁。
  - 48 『台湾総督府国民精神研修所』（台北、台湾総督府文教局社会課、1939年）、5頁。
  - 49 蔡錦堂『日本帝国主義下台湾の宗教政策』（同成社、1994年）、106 - 107頁。
  - 50 第1回敬神教化指導者講習会では曾景来以外に以下12名の宗教関係者が講師として招聘された。台湾神社宮司田村晴胤、師範学校校長大浦精一、総督府事務官慶谷隆夫、総督府社会教育官関川保、台南神社宮司松本頼光、総督府属加村政治、台湾神社彌宜松崎貞吉、嘉義神社宮司長東有邦、台北稲荷神社社司伊東伊代吉、台湾神社主典吉野松男、高雄神社社掌渡邊幸平、建功神社社掌三森淳男に続き曾景来が招聘された。錚々たる顔合わせであり、同時に曾景来の重要性も浮き彫りになっている（「曾景来（昭和14年度敬神教化指導者講習会講師ヲ命ス）」『台湾総督府公文類纂』冊10099文號79 1939年9月1日）。
  - 51 曾景来「皇国と仏教」（『南瀛仏教』第13巻第4号、1935年4月）、7-8頁。
  - 52 曾景来「皇国と仏教」（『南瀛仏教』第13巻第4号、1935年4月）、8頁。